

令和4年9月15日
横浜創英 高等学校
副校長 本間 朋弘

本校のコラボレーションウィーク(合教科授業)の考え方について

本校では、9月の2週目の1週間、高校一年生においてコラボレーションウィークと銘打って合教科で授業を展開します。26名の教員が教科・科目の違う教員と組んで2人1組となって計13の講座を出します。

1日目に合教科授業の意義について講演をし、2日目にペアの教員が授業を行って生徒にミッションを与えます。3日目に生徒はミッションに対する研究をし、4日目の最終日にプレゼン発表する流れです。優秀なプレゼンを行った13組のグループが9月末の文化祭で発表を行います。

今は終着点がとてもあやふやな時代です。高度成長期の60年代、大人は子供たちに同じことを言ってました。早くしなさい、ちゃんとしなさい、いい子にしなさい、そしてただひたすら覚えなさい。それは産業界がそういう人材を求めていたからです。そして産業界にはもっとたくさん作ろう、もっと安く作ろう、もっと平均的なものを作りましょうという、誰もが認める万人の正解がありました。でも、今は成長期が終わった成熟した社会です。誰もが認める万人の正解などなく、価値観は多様です。そういった社会に求められる能力は、たった一つの正解を探し出す力ではなく、自分の知識や技能や経験を組み合わせる自分自身の考えを導き出す力。そのためには一つの教科の力だけで課題を解決することは困難で、合科目の力を持つことが求められます。

学習指導要領の改訂で繰り返して言われていることは、社会構造が産業社会から知識基盤社会へと転換されたことによって、世界は様々な意味で正解のない時代に入ったといえます。今は答えのない時代になったのに、答えがあるのが学校であり、答えに向かって生徒を導くのが学校の標準になっています。人生は答えがないのに学校は答えがあるのが標準ではこれからの社会では通用しません。その時に教科として何ができるのかをもう一度考えて、教科の本質を見つめなおしてみようと、教員間で話し合いを持ちました。

教科によって対象にアプローチする方法論も表現方法もそれぞれ違います。例えば理科は自然の事物や現象を対象とするが、死生観は教えません。それは理科が実証主義という立場に立つからそういう判断になる。国語はそういう立場をとりません。小説は時にはファンタジーになります。ファンタジーは実証的ではないかもしれないが、人生においては時には真実になることがあります。理科には理科学的な世界観があり、国語には国語的な世界観があり、どちらも大切な価値観であり、私たちはそれを組み合わせ生きています。

表現方法も教科によって違います。数学は、多数派が感覚的に何を言おうが、それが論理的には間違っているならば、間違っているものは間違っていると言える力を数学は育てる。しかし、社会科は決着をつける議論はせずに、多様な価値観を尊重して対立をコントロールする力を育てます。

それぞれの教科ごとに方法論があって表現方法がある。それを状況に応じて組み合わせる力を育ててみようというのが、本校の合教科の発想です。